日本語教育分野における「キャリア」に関する研究の動向

―2004年から2022年までの文献調査から―

Trends in Research on “Careers” in the Field of Japanese Language Education : A Survey of the Literature from 2004 to 2022

松尾　憲暁・山本　晋也・髙井　かおり

要旨：

本研究では、日本語教育分野におけるキャリア研究が、誰を対象に、何を論じてきたのかについて、NII学術情報ナビゲータ（CiNii）を用いて文献調査を実施した。「日本語教育」及び「キャリア」をキーワードとして検索を行った結果、計124本の論文がヒットした。日本語教育分野において「キャリア」という用語が継続的に見られるようになったのは2004年以降であり、2016年もしくは2018年を境に増加傾向にあること、主な対象は日本国内の教育機関に在籍する留学生であるが、広範な対象についても論じられていることが明らかになった。研究テーマは「就職及びキャリア支援のあり方」「日本語授業におけるキャリア教育実践のあり方」「キャリアに焦点を当てた日本語学習者研究」「キャリアに焦点を当てた日本語教師研究」の４つに大別された。本研究の結果から２つのことが言える。一つは、日本語学習者の多様化と並行して、「キャリア」を扱う研究における研究対象が多様化、細分化されていること、もう一つは、「キャリア」の捉え方が、個人の将来選択に関わる資質や能力、特に日本語能力の育成に関わるものから、個人の生涯的な発達過程として捉えられるようになってきていることである。

１．研究背景

近年、日本語教育研究・実践に関して、「キャリア」への注目が集まっている。『公益財団法人日本語教育学会理念体系―使命・学会像・全体目標・2015-2019年度事業計画』（公益財団法人日本語教育学会 2017）に示された、日本語教育が関わる社会的研究課題の一つに「多様なキャリア形成のための日本語教育内容の体系的再編成」が、社会的課題の一つに「キャリアとことば：外国人の就労を支援するための『日本語教育』」が挙げられている。これを受け、2020年には学会誌『日本語教育』175号にて「日本語が拓く多様なキャリア形成」についての特集が組まれている。また、2023年４月発行の184号の特集テーマは「ともに学び未来を描くキャリア形成の現場」である。

「キャリア」という概念は、心理学を中心に個人の生き方や発達に関連する概念として長らく議論されており、昨今の日本語教育におけるキャリア研究・実践の発展においてもその影響が大きい。しかし、個人の内的変容としてのキャリア形成が言語教育とどのように関わるのかという議論は、管見の限り見当たらない。

そこで、本研究では今後の日本語教育とキャリアを結ぶ研究のあり方を考えていくために、日本語教育分野において、「キャリア」をキーワードとする文献調査を実施した。その結果を踏まえ、日本語教育分野におけるキャリア研究が誰を対象に、何を論じて来たのかを考察し、今後の日本語教育とキャリアを結ぶ理論の構築を目指す一助とすることを目的とする。

2．調査方法

調査手順は、以下の通りである。

まず、NII学術情報ナビゲータ（CiNii）を用い、「日本語教育」及び「キャリア」をキーワードとする文献検索[1)]を行った。その結果、学術研究に相当しないもの（書評・目次等）、結果が重複して表れたもの、キーワードが所属先・掲載雑誌名のみにヒットしたものを除き、計124本の対象文献を抽出した。次に、これらの対象文献を年代別に整理し、研究対象・キーワード・研究カテゴリーなどの情報を一覧化した（表１）。

上記の手順を経て作成された文献リストを分析対象として、日本語教育分野におけるキャリアが、誰を対象に、何を論じるものであったかを分析した。以下、「研究動向」「研究対象」「研究テーマ」の３項目について分析した結果と考察を示す。

表１　文献リストの一部

	著者	出版年	表題	雑誌名	検索キーワード	対象（学習者／教師／生活者等）	内容	カテゴリー	サーチエンジン	備考
96	尾沼玄也．加藤林太郎	2021	日本語教師のキャリア形成に関する一考察：現役教師の経験したやりがいと失敗から	拓殖大学日本語教育研究，6，57-74	日本語教師，職業継続，ライフストーリー，やりがい，失敗	中堅日本語教師	半構造化インタビュー／ライフストーリー研究	日本語教師のキャリア形成	CiNii	日本語教師×キャリアと重複
97	鈴木加奈子、神田麻里、野口直子	2021	キャリア教育と日本語教育の融合による可能性を考える：「SGDP共通プログラム」と日本語科目の連携の試みから	静岡大学国際連携推進機構紀要3，29-46	キャリア教育と日本語教育の融合、留学生就職促進プログラム、伴走型支援	留学生	留学生就職促進プログラム、キャリア教育プログラム、キャリア教育プログラムと日本語教育プログラムの連携事例報告	実践報告、留学生の就職支援	CiNii	
98	稲田栄一	2021	日本語教育学を専攻した中国人大学院生のキャリア観変容と職業選択ー大学院修了後、日本語教師以外の道に進んだのは何故かー	APU言語研究論叢，6，66-86	中国人大学院生 キャリア選択 日本語教師 非母語話者教師 TEA	大学院で日本語教育学を専攻した中国人留学生	半構造化インタビュー／TEA／中国人大学院生1人	留学生のキャリア観	CiNii J-STAGE	日本語教師×キャリアと重複 同じ論文が2件ヒット
99	佐藤幸代	2021	留学生のキャリア形成支援・就職支援をめぐる研究の動向と主要論点	名古屋高等教育研究21，227-246	―	留学生 and （就職 or キャリア）で検索した論文	留学生のキャリア形成支援、就職支援の動向／レビュー論文	留学生のキャリア支援、レビュー論文	CiNii	
100	岩本 穣志	2021	上級キャリア日本語クラスにおけるオンライン授業の実践	日本語教育方法研究会誌27(1) 102-103	オンライン授業、ICT、キャリア日本語	留学生	アンケート調査（受講学生）	授業研究(学生アンケート調査)	CiNii J-STAGE	
101	小柴 裕子．福岡 正蔵	2021	オンデマンド授業における留学生のキャリア支援：一卒業生のインタビュー動画によるロールモデルを通してー	日本語教育研究会誌27(1)，12-13	留学生、キャリア支援、動画制作、オンデマンド、KHCoder3	留学生	オンデマンド授業（留学生のキャリア支援を目的とした授業「ライフデザイン」）の実践報告	実践報告、留学生のキャリア支援	CiNii J-STAGE	

3．結果と考察

3.1　研究動向

日本語教育分野において「キャリア」という用語が継続的に見られるようになったのは2004年以降であることが明らかになった（図１）。2004年から2015年までの期間は「日本語教育」と「キャリア」をキーワードとする研究は年５本程度と少ないものの、2016年と2018年に10本、2019年に15本となり、以降対象文献数は増加傾向にある。このことから、2004年と、2016年もしくは2018年という時期が転機になっていると言える。社会状況の変化が文献数に表れるのには一定の時間を要すると考えられるが、その点に留意しながら、以下、上記の時期の日本語教育を取り巻く社会状況を考えてみたい。

2004年は、2000年代に入り世界経済のグローバル化に伴う国際的な人材育成に注目が集まり始めた時期である。2003年には、1983年に目標として掲げた「留学生10万人計画」が達成されているが、留学生の受け入れ体制の問題が表面化し、その年の12月の「中央教育審議会答申」におい

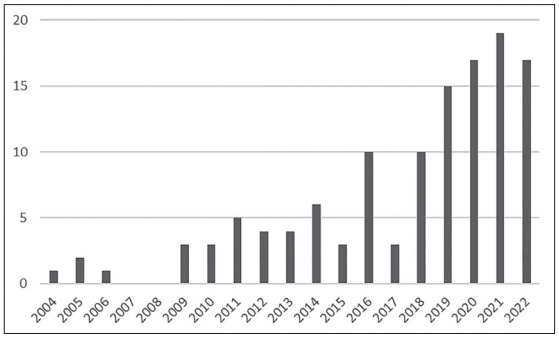

図１　年代別文献数（2004年から2022年まで）

ては、留学生の受入れに当たっては、量の拡大だけでなく、質の確保のための取組みを強化する必要があるという報告がなされている。このように留学生の質にも焦点が当たってきたことと関連し、日本語教育がその後の進路や就職等と関わることが増えたのではないかと考えられる。しかし、2015年頃までは研究の数はさほど多いとは言えず、注目が集まっていたというほどではない。

数的な転換期となっている2016年もしくは2018年という時期は、日本語学習者の多様化が2000年代よりも進んだ時期である。2008年のリーマンショック、2010年の尖閣諸島問題による日中関係の悪化、2011年の東日本大震災等の影響を受け、在住外国人の数はしばらく減少傾向にあったが、2013年以降、コロナウイルスの感染が拡大する2019年までは右肩上がりに増加していく（出入国在留管理庁 2023）。

留学生については、2007年から2012年までの「アジア人財資金構想」、そして2008年の「留学生30万人計画」以降、「卒業後に就職し、日本に定住する」というキャリアパスが描かれたが、それが現実味を帯びてきた時期が2016年もしくは2018年であると言える。そして、日本語教育においては、アカデミックジャパニーズを基礎とした、就職支援のための日本語教育としてビジネス日本語教育が位置付けられ、それが従来からのキャリア教育と接続していく（堀井 2018）。

また、2008年の介護士・看護福祉士受け入れ開始、2009年の在留資格「技能実習」や2016年の在留資格「介護」の創設等によって、日本語教育におけるキャリアの研究対象の幅も広がりを見せている。前述の通り、学会誌『日本語教育』175号（日本語教育学会 2020）で「多様なキャリア形成」という言葉が用いられていることからもこのことを窺い知ることができる。この背景には、日本国内において少子高齢化が進み、将来的な生産人口の減少が予測される中で、上述した外国人の受け入れ推進が進められたことが挙げられる。それに伴い、国の外国人受け入れ政策が大きく転換され、2019年の日本語教育推進法等の制定など、日本語教育分野にも多大な影響を及ぼし、現在に至っていると考えられる。

この流れの中で、2017年以降、高度外国人材の日本への定着を促進する、「留学生就職促進プログラム」や「留学生就職促進教育プログラム認定制度」などの文部科学省委託事業も展開されている[2)]。留学から就労、そして定着へというキャリアパスが強く推奨されるようになり、そのことが研究対象として日本語学習者のキャリアへの注目を喚起させたのではないかと考えられる。

また、この時期の傾向として、日本語学習者だけでなく、日本語教師やその周辺の人々のキャ

リアに関する研究が増えている。上記の日本語教育推進法等の制定とも関わるが、日本語教育の充実が叫ばれるようになり、質の高い日本語教育人材[3)]の養成にも目が向けられる。2000年の「日本語教育のための教員養成について（平成12年教育内容）」が大幅に見直され、2019年には「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版」がまとめられ、その中で日本語教育人材のキャリアパスが具体的に明示されている。また、これに続く「『潜在的な』日本語教師」（文化庁 2022）や「登録日本語教員」（文化庁 2023）という国の政策が、従来から存在する日本語教師の多様性や待遇改善の議論とも相まって注目を集めているものと考えられる。

3.2 研究対象

研究の対象を概観すると、日本語学習者（64.7%）、日本語教師（実習生を含む）（21.8%）とその他（教材・プログラム開発等の日本語教育におけるキャリア教育の課題）（16.9%）と大きく３つに分けられる（図２）。最も多いのは日本国内の教育機関に在籍する留学生を対象とした研究であり、学習者対象の６割、対象者全体でも４割を占める。留学生の場合、外国人留学生全般を扱うものが多いが、所属（日本語学校や大学、大学でも交換留学や学部、大学院等）、専門（文系、理系等）、国籍（中国人、韓国人等）のように属性で限定する研究も見られた。留学生以外の学習者は、元留学生や就労者、技能実習生、年少者、生活者としての外国人、海外教育機関で日本語を学ぶ学習者など多様である。また、学習者を日本語非母語話者に限らず、日本人学生や教職員を含める研究や、その教育機関に在籍する全学生を対象とする研究も見られた。

これらの年代別の数の推移を見ると、全体的に数が増えているのに伴い、対象も多様化していることがわかる（図３）。3.3で述べる研究テーマと関わるが、例えば三代（2014）では、留学生２人にライフストーリー・インタビューを行い、セカンドキャリア支援と結び付けた日本語教育の可能性を述べている。留学生の就職支援の日本語教育が「ビジネス日本語教育」のようなスキルトレーニングとしての側面を持った教育に加え、「キャリア日本語教育」のように、その人のキャリア形成、つまり就職というキャリア形成の一場面に限らず、人生全体を視野に入れたライフキャリアを支援する教育も見られる。このように、留学生の就職支援のための日本語教育が日本語学習者のキャリア形成支援と捉えられるようになってきたことから、研究対象の幅が広がったと考えられる。さらには、3.1でも触れた通り、学習者のみでなく近年は日本語教師のキャリア形成を扱う研究が増えていることが数字上も見て取れる。但し、日本語教師のキャリアに関する研究の場合にも、職業・職歴・職能としてのワークキャリアと人生における仕事の位置付けとしての

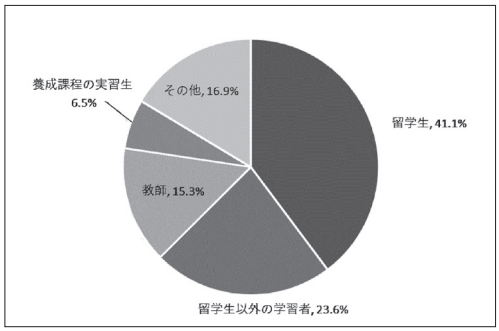

図２　研究対象者

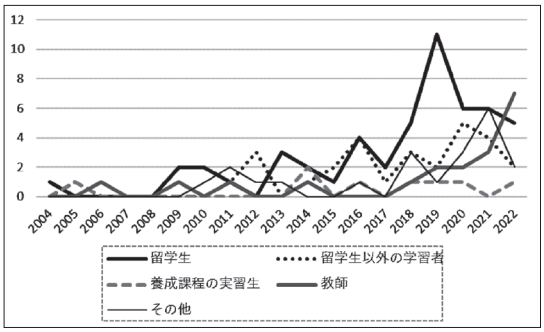

図３　年代別研究対象者

ライフキャリアの意味合いが混在していることには注意する必要がある。つまり、前者は「教師の成長」という文脈の中でキャリアという用語が使われるのに対し、後者は「教師と人生（ライフ）」という文脈の中で扱われる。両者を完全に切り分けることは難しいが、どのような視点で「キャリア」という用語が用いられているかについては慎重に見ていく必要がある。

3.3　研究テーマ

研究テーマは、その傾向から①「就職及びキャリア支援のあり方」②「日本語授業におけるキャリア教育実践のあり方」③「キャリアに焦点を当てた日本語学習者研究」④「キャリアに焦点を当てた日本語教師研究」の４つに大別された。以下、カテゴリーごとに２つの文献を挙げ、説明を加える。

①就職及びキャリア支援のあり方

１）古賀万紀子（2018）「外国人大学生に対する就職支援の文脈における日本語教育の課題：「ビジネス日本語教育」から「キャリア日本語教育」へ」

２）塚田麻美（2021）「日本語学校におけるキャリア支援の実態と可能性：支援経験のある日本語教師の語りの分析」

このカテゴリーは、従来行われているビジネス日本語教育や留学生のキャリア支援というものを、キャリア教育やキャリア・カウンセリングの枠組みから批判的に捉え、新たな教育・支援のあり方を提案したものである。古賀（2018）は海外の大学で日本語を学ぶ外国人大学生を対象にした実践から、キャリア教育は特定の活動や指導方法に限定されるものではないとして、「キャリア日本語」を提案する。塚田（2021）は、日本語学校で留学生の進路指導に関わった経験がある日本語教師の語りをヘルピングというキャリア・カウンセリングのモデルを分析的枠組みとして分析し、ヘルピングを取り入れたキャリア支援の可能性を示している。このような研究は、キャリア研究の知見を日本語教育に取り入れている点で、今後の日本語教育とキャリアの関わりを考える上で重要な研究だと考えられる。

②日本語授業におけるキャリア教育実践のあり方

１）宮崎聡子（2019）「キャリア支援課との協働による日本語授業：2018年度「キャリア日本語」の実践より」

２）黄均釣・山本晋也（2020）「中国の大学日本語専攻者のキャリア形成を考える授業実践―一貫性のあるキャリア・ストーリーの構築を目指して」

このカテゴリーは、特に教室実践に焦点化したものである。宮崎（2019）は、日本語教師が大学のキャリア支援課と協働して授業を組み立てるという役割分担を伴った就職支援について述べている。黄・山本（2020）は、中国の大学で行われた日本語教育実践にキャリア研究の知見を取り入れ、将来設計につながるキャリアの物語を、レポートという形で表現することをめざすものである。なお、①で挙げた古賀（2018）は、就活対策、自己分析、能力育成、自己構成という４つの枠組みを提示しているが、この枠組みは実践を捉えるときに役に立つと考えられる。

③キャリアに焦点を当てた日本語学習者研究

1）李奎台（2016）「ある成人韓国人の対人関係に関する価値観の変容：振り返りインタビューによる事例研究」

2）近藤行人・西坂祥平（2021）「理系の外国人研究者が向き合う日本語に関する経験―日本でアカデミックキャリアを積む研究者のストーリー」

このカテゴリーは、日本語学習者へのインタビュー調査等を通して、キャリア形成をめぐる個人の経験や価値観の変容などを長期的な視点から捉えようとするものである。李（2018）は、日本での留学を経て日本企業で働く外国人社員の対人関係をめぐる経験の語りから、就職前教育の見直しについて言及している。また、近藤・西坂（2021）は、日本の大学に勤める外国人研究者の語りから、彼らを取り巻く言説・社会構造に言及している。これらは日本語学習者のキャリア形成をめぐる現在の構造の問題点を指摘し、教育や支援のあり方について提案を行う研究である。

④キャリアに焦点を当てた日本語教師研究

1）布施悠子（2019）「初任日本語教師キャリア形成過程の可視化の試み―複線径路・等至性アプローチを用いて―」

2）西野藍・坪根由香里・八田直美（2020）「タイの中等日本語教員Aのキャリア形成過程―複線径路・等至性アプローチ（TEA）による分析―」

③が日本語学習者に焦点化しているのに対して、④は現役の日本語教師、日本語教師養成講座在籍者、以前教師をしていた人々等に焦点を当て、日本語教師養成や研修のあり方に寄与する研究である。布施（2019）は前職を退職して養成講座に入学し、日本語教師の職に就いた者を対象に、そのキャリア形成過程を明らかにし、教師のキャリア形成支援への提言を行っている。このような教師のキャリアに焦点を当てた研究は日本人日本語教師を対象とした研究が多いが、西野他（2020）のように海外の日本語教育に従事するノンネイティブ教師を対象にし、そのキャリア形成から公的支援のあり方を模索するものも見受けられる。

これら4つのカテゴリーでは、研究対象の結果とも関わるが、②と③（日本語授業・学習者研究）が相当数を占めていた。なお、近年では、①や②（就職及びキャリア支援、日本語授業）と関連し、古賀（2018）・宮崎（2019）のように、日本語教育とキャリア教育を融合させる「キャリア日本語」のような科目が見られるようにもなっている。この「キャリア日本語」という言葉は、近年、大学や日本語学校等の授業科目名としても散見されるようになったが、「キャリア」の定義同様に、機関や教員によって授業内容や対象が大きく異なる点には注意が必要である。

また、③や④（学習者研究、教師研究）に関して、このカテゴリーに含まれる研究の多くがライフストーリーや複線径路等至性アプローチ（安田・サトウ 2022）のような質的研究手法を採用しているという点も特徴的である。これには近年の日本語教育分野における質的研究への関心の高まりも一つの要因であると考えられるが、個別性や生涯発達の視点を意味的に含んでいる「キャリア」と、このようなプロセスを扱う質的研究手法との相性が良いということも挙げられるのではないだろうか。

一方で、③や④（学習者研究、教師研究）のカテゴリーにおいて、量的なアプローチからの研究はほぼ見られなかった。これについて、日本語教育以外の分野のキャリア研究においては量的

研究による十分な積み上げがなされている。質的研究と量的研究が相補的なものである（やまだ 2013）ことを踏まえると、日本語教育分野のキャリア研究においても量的なアプローチからの研究が必要であると考えられる。

4．総合考察

「日本語教育」と「キャリア」をキーワードとした研究動向、および研究対象やテーマの変遷からは、２つのことが言える。一つは、日本語学習者の多様化と並行して、「キャリア」を扱う研究においてもその研究対象が多様化、細分化されていることである。また、多様化・細分化の傾向と同時に、キャリアに焦点を当てた学習者研究・教師研究においては、個のキャリアへの注目も見られる。つまり、一人または少人数に研究対象を絞り、彼らのキャリアがどのように形成されているか、そこにどのような社会的、文化的な要因が関わっているかを、丁寧に分析していくような研究がされている。これには、2000年代以降の、教育面における学習者一人ひとりの個別性への注目や、研究面における質的アプローチの浸透等が影響を与えていると考えて良いだろう。

もう一つは、「キャリア」の捉え方が、個人の将来選択に関わる資質や能力、特に日本語能力の育成に関わるものから、個人の生涯的な発達過程として捉えられるようになってきていることである。特に、2016年以前の研究動向において、キャリア形成に関わる日本語教育は、「ビジネス日本語教育」を通じて学習者の日本での就労を支援するという立場が主であった。そこでは、キャリア形成を下支えするものとして、就労現場で必要となる言語の習得を促す役割を担うという認識が強かった。この傾向は今も主流と呼べるかもしれないが、このような研究に加えて、近年では、「キャリア日本語教育」という言葉からもわかるように、日本語ということばの学び自体がライフキャリアを含めたキャリア形成と深く関わるものであるという考え方も見られるようになっている。これには、湯（2011）が指摘するように、「ビジネス日本語教育はあくまでもビジネス領域の日本語コミュニケーション能力を培うことによって、留学生のキャリアを高めるものであり、キャリア教育そのものではない」（p.71）という考え方が背景にある。そのような考え方に加えて、1990年代以降のナラティブ、つまり物語による認識論、方法論の転換も大きく影響していると考えらえる。つまり、「物語ること」が個人のアイデンティティ形成と繋がるという考え方で、この点で言語教育とキャリア、特にライフキャリアという視点とが深く響き合っていると考えることができる。

なお、このような研究の流れはキャリア研究全般とも概ね一致している。1980年代以降、社会の安定性が揺らぐ中で、個人がキャリアを組織に委ねるような構造が崩れ、キャリアの主体を個人に置くキャリア観に注目が集まっていく。その中で、社会構成主義の影響等も受けながら、ナラティブへの関心が高まり、コクランのナラティブ・アプローチ（Cochran 1997/2016）やサビカスのキャリア構築理論（Savickas 2011/2015）に代表される「コンストラクション系のキャリア理論[4)]」（下村 2015）が1990年代以降、展開されていく。

すでに見てきたように、日本語教育分野でのキャリア研究が展開されていくのは2000年代に入ってからだということを考えると、キャリア研究におけるナラティブ・アプローチが広がり始めていた時期とほぼ重なっており、ナラティブへの関心が個のキャリアに注目した研究の広がり

に大きく貢献しているものと考えられる。その一方で、キャリア研究は、パーソンズの職業選択理論（Parsons 1909）やスーパーのキャリア発達理論（Super 1980）のような、膨大なカウンセリング現場の知見の蓄積の上に成り立っている（渡辺 2018）のに対して、日本語教育分野においてはそこに十分な蓄積がないままに進められていることは否めない。研究手法において、どのようなアプローチが適しているかは研究目的にもよるため、甲乙をつけるべきものではないが、「キャリア」という複雑な現象を捉えていくには、研究の幅の広がりについて検討していくことも重要であろう。

5．まとめと今後の課題

本調査からは、日本語教育分野において、キャリアに関わる研究が質、量ともに変化していることが確認できた。その中では、職業選択や就職支援のようなワークキャリアのみならず、個人の人生と関わるライフキャリアに関する研究も行われている。これは日本語教育が言語習得のみを目指すものではなく、個人の人生にも深く関わるものであるとする、日本語教育全体のパラダイムシフトとも関連していると考えられよう。

このようなキャリアに関する研究への関心の高まりの背景には、少子高齢化が進む中での外国人受け入れ等の社会状況の変化や、それに伴う外国人留学生の定住化に向けた政策等が影響しているものと考えられる。その中で、個人を取り巻く環境や社会制度の変化を受け、広く個人の内面的なキャリアを捉えようとする研究や、キャリア形成支援の在り方等に言及する研究が増えつつある。一方で、多くの日本語教育に関する研究において、「キャリア」は一般的な用語として用いられており、「キャリアとは何か」「なぜ日本語教育分野の研究でキャリアについて論じる必要があるのか」などについては十分に検討されていない。但し、古賀（2018）や黄･山本（2020）のように、日本語教育研究として「キャリア」を取り上げることの意味をしっかりと咀嚼した研究も近年増えてきており、理論的な基盤が整いつつある。今後は日本語教育研究とキャリア研究とを結びつけた議論がより活発化していくものと考えられる。

近年のキャリア研究において、キャリア構築理論を提唱したSavickas（2015）は、急激な社会環境の変化の中で自己を見失わないためにも、他者との関わりの中でキャリアを構築していく必要があると述べている。研究対象・テーマともに多様化しつつある日本語教育分野におけるキャリア研究においては、より広い社会との繋がりの中で個人のキャリアを捉える研究が求められる。そのためにも、心理学や社会学等の他分野におけるキャリア研究の成果を参照しつつ、キャリアと日本語教育がいかに関わるのかについて、今後、検討していく必要がある。なお、本研究では「日本語教育」「キャリア」をキーワードとする文献調査を行ったが、日本語教師のキャリアを取り扱った研究には「日本語教育」という用語が出現せず､検索にヒットしない文献も存在した（例えば、佐藤・三代（2019)、若杉（2019))。今後、調査を拡大していく中での課題としたい。

付記

本稿は2022年９月17～18日に実施されたアジア人材環流学会ハノイ国際セミナー 2022の研究発表（ポスター発表）『日本語教育において「キャリア」はどのように扱われてきたか』の内容を加筆修正したものである。なお、本研究はJSPS科研費基盤研究C「日本語教育人材の非直線

型キャリア形成に関する基礎研究」22K00635（代表：松尾憲暁）の成果の一部である。

注

1　この文献検索は2023年３月27日に実施した。なお、本研究では「科学技術情報発信・流通総合システム」（J-STAGE）でも同様の検索を実施したが、結果がCiNiiと重複しているため、本稿ではCiNiiの結果として記述する。

2　https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1370919.htm

3　文化庁（2019）は、日本語教師、日本語教育コーディネーター、日本語学習支援者の総称として日本語教育人材という名称を用いている。

4　下村（2015）は、何らかの意味でコンストラクション（構築、構成）をキーワードとしている理論を「コンストラクション系のキャリア理論」と総称している（p.10）。その理由として、これらの理論群で用いられる用語が、日本語では、社会構成主義、社会構築主義、構成主義、構築主義など、様々な訳語が当てられていることを挙げている。

参考文献

黄均釣・山本晋也（2020）「中国の大学日本語専攻者のキャリア形成を考える授業実践―一貫性のあるキャリア・ストーリーの構築を目指して」『一橋日本語教育研究』８, pp.25–38.

古賀万紀子（2018）「外国人大学生に対する就職支援の文脈における日本語教育の課題―「ビジネス日本語教育」から「キャリア日本語教育」へ」『早稲田日本語教育学25, pp.21–40.

Cochran, L.,（1997）*Career counseling: A narrative approach.* Thousand Oaks, CA: Sage.［コクラン，ラリー .，宮城まり子・松野義夫（訳）（2016）『ナラティブ・キャリアカウンセリング―「語り」が未来を創る』生産性出版）

近藤行人・西坂祥平（2021）「理系の外国人研究者が向き合う日本語に関する経験―日本でアカデミックキャリアを積む研究者のストーリー」『日本語教育』179, pp.31–46.

佐藤正則、三代純平（2019）「「職業として確立していない」言説に対抗する語り―1980年代後半にキャリアを始めた日本語学校教師のライフストーリーから」『語りの地平―ライフストーリー研究』４, pp.48–68.

Savickas, M. L.,（2011）*Career counseling.* Washington DC: American Psychological Association.（サビカス，M. L.，日本キャリア開発研究センター（監訳）（2015）『サビカス キャリア・カウンセリング理論―〈自己構成〉によるライフデザインアプローチ』福村出版）

下村英雄（2015）「コンストラクション系のキャリア理論の根底に流れる問題意識と思想」渡部昌平（編）『社会構成主義キャリア・カウンセリングの理論と実践―ナラティブ、質的アセスメントの活用』福村出版，pp.10–43.

出入国在留管理庁（2023）『令和４年末現在における在留外国人数について』〈https://www.moj.go.jp/isa/content/001393064.pdf〉（2023年４月30日取得）

塚田麻美（2021）「日本語学校におけるキャリア支援の実態と可能性―支援経験のある日本語教師の語りの分析」『小出記念日本語教育研究会論文集』29, pp.205–214.

湯謹（2011）「ビジネス日本語教育の試み：カリキュラム編成をめぐって」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』15, pp.69–75.

西野藍・坪根由香里・八田直美（2020）「タイの中等日本語教員Aのキャリア形成過程―複線径路・等至性アプローチ（TEA）による分析―」『ICU日本語教育研究』16, pp.3–19.
日本語教育学会（2017）『公益社団法人日本語教育学会理念体系―使命・学会像・全体目標・2015–2019年度事業計画』
日本語教育学会（2020）『日本語教育』175号
日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議（2000）『日本語教育のための教員養成について』
布施悠子（2019）「初任日本語教師キャリア形成過程の可視化の試み―複線径路・等至性アプローチを用いて―」『日本語教育』173号, pp46–60.
文化庁（2019）『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』
文化庁（2022）『令和５年度概算要求の概要』〈https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/yosan/pdf/93758701_01.pdf〉（2023年４月10日取得）
文化庁（2023）『日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律案（仮称）の検討状況について』〈https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/nihongo/nihongo_117/pdf/93833701_06.pdf〉（2023年４月10日取得）
堀井恵子（2018）「「ビジネス日本語教育研究の目指すもの」再考―ビジネス日本語研究会の歩みとこれから―」『BJ ジャーナル』創刊号，pp.3–15.
宮崎聡子（2019）「キャリア支援課との協働による日本語授業―2018年度「キャリア日本語」の実践より」『長崎外大論集』23, pp.85–97.
三代純平（2014）「セカンドキャリア形成へ向けた文化資本としての日本語―スポーツ留学生のライフストーリーから―」『言語文化教育研究』12, pp.221–240.
安田裕子・サトウタツヤ（編）（2022）『TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述―保育，看護，臨床・障害分野の実践的研究』誠信書房
やまだようこ（2013）「質的心理学の核心」やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也（編）『質的心理学ハンドブック』新曜社，pp.4–23.
李奎台（2016）「ある成人韓国人の対人関係に関する価値観の変容―振り返りインタビューによる事例研究」『日本語教育実践研究』３, pp.137–147.
若杉美穂（2019）「日本語教師のキャリア形成における大学院進学の意味づけ」日本語日本文学論叢』14，pp.49–62.
渡辺三枝子（編）（2018）『新版 キャリアの心理学［第２版］―キャリア支援への発達的アプローチ―』ナカニシヤ出版
Parsons, F., (1909) *Choosing a vocation*. Boston, MA: Houghton-Mifflin.
Super, D. E., (1980) A life-span approach to career development. *Journal of Vocational Behavior, 16* (3), 282–298.